

らびう プラス

2013年12月中旬の若手県陸前高田市。かさ上げ工事の盛り上がり目立つ市街地に北風が吹き抜ける中、国道沿いのプレハブ小屋に英語や英会話を音読する声が響く。「これは?」「Giraffe(キリン)」。イラスト付きの英語教材を前に、小学4年の菅野愛菜さん(10)が、女性のボランティア講師に楽しそうに答える。

毎月30人超参加

向かい側では、近くの仮設住宅に住む70歳の女性が「かれはは撤去された」と、英語で「言」の「」と別のボランティアに質問。米国企業のアレスリリックスを音読する中年男性の姿もある。

この集まりは11年11月から毎月1度開かれる「Koms英語音読会」。東京から通う古森剛さん(45)とボランティア講師らで作る「一般社団法人はなぞう基金」が運営する。音読会の参加メンバーは幼稚園児

から70歳代まで幅広く、学習内容も興味と英語力で自由に変えるのが特徴だ。古森さんは外資系コンサルティング会社の極東地域代表。当初は物資を支援する目的で陸前高田に来たが「最も得意なこととして復興に役立ちたい」と考え、英語学習の支援を始めた。

復興のチヤイム



「地域の将来を支えるには教育が一番大事」と賛同した地元の大坂美奈子さん(71)が場所を提供する。自宅と津波にのまれ、偶然松の木に挟まって命を拾ったという大坂さん。自宅跡に私費でプレハブ小屋を設置し、「ママハウス」と名付けて憩いの場として開

老若男女「Enjoy English!」 陸前高田

英語音読会 未来に響け



プレハブ小屋で開かれる英語音読会で、小学生(2013年12月、岩手県陸前高田市)

国際交流弾み 街の活力に

通う小中学生計7人が手を学んだ。12年からは日本の高校生約50人が陸前高田に集まる「日米高校生サミット」の運営にも協力。地元高校生らが地域の観光振興などについて英語で討議する光景もみられた。

自作短歌を翻訳

大人も負けてはいない。開始当初から音読会に通う種店経営の佐藤貞二さん(58)は英語の被災体験記をまとめ、海外でも販売されるほど。吉田恵美さん(59)、由美さん(53)姉妹も13年春、英語と日本語の両方を使った自作の短歌と油絵の作品集を出版した。3人は、いずれも音読会が英語を本格的に学ぶようになった人だった。

音読会での取り組みに対しては「英語を学ぶ人が増え、海外との交流が深まれば復興にも役立つ」と市役所幹部も期待を寄せる。必ずそう宣言する。

お断り「こゝろの「冊」は休みました」

青森にあるのは地域を襲う深刻な人口減と高齢化の問題だ。

国立社会保障・人口問題研究所の推計では、同市の20年の人口は10年より2割減の約1万8千人。75歳以上が全体の4分の1に達する。一街の活力を失わないために、住民一人ひとりの力を高めなくてはならない(市幹部)

古森さんは一人ひとりにあたる約2千人が英語を継続的に学ぶようになれば、街の雰囲気が大きく変わるはず」と話す。「英語が通じる」との評判は、海外の観光客やビジネス客をひきつける。国際化は復興の現実策だと指摘する。

東日本大震災後、被災地の高校生らを対象に、海外交流を後押しする支援事業が相次いだ。いずれも「地域の将来を支える人材を育てたい」との期待が込められた取り組みだ。

日本政府などが主導し、2012年6月から13年3月まで行った「キズナ強化プロジェクト」では、岩手や宮城、福島などの高校生や大学生を約2700人、米国やアジア諸国などに派遣。英語学習や現地学生との交流などを推進する一方、41の国・地域から約8100人の高校生や大学生を被災地に迎え入れた。

被災3県高校生ら 2700人を海外派遣

米国大使館と公益財団法人「米日カウンシル」が運営する「TOMODACHI」でも、12年と13年に約50の交流プログラムを実施。被災地の高校生や小中学生らを米国などに派遣し、約1千人が地域貢献について学ぶ短期留学などを体験した。